



Data

監督：ルドヴィグ・バーナード
 出演：ジュール・ベンシェトリ/ラ
 ンペール・ウィルソン/クリ
 スティン・スコット・トーマ
 ス

■ ■ ショートコメント ■ ■

◆ 「音楽もの」「ヴァイオリンもの」の良さに、出生の秘密を含む父子関係の妙を絡めた超名作が、陳凱歌 (チェン・カイコー) 監督の『北京ヴァイオリン』(02年) だった (『シネマ 5』299頁)。そこでは、テレサ・テンの『月亮代表我的心』を含むさまざまなクラシックの名曲が登場したが、最大の注目曲はストーリーのクライマックスに向けて弾かれる「チャイコン」ことチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲だった。

陳凱歌監督は『始皇帝暗殺』(98年) (『シネマ 5』127頁) 等の歴史大作でもすばらしい作品を発表しているが、「かねてから西洋のクラシック音楽のファンで、文化大革命の中でも、わずかなレコードを何とかして聴く機会を見つけ、涙を流すほど感動したものだった」という陳凱歌監督に、こんなすばらしい作品があったとくにビックリしたものだ。

◆ それに対して、「音楽もの」「ピアノもの」としての感動を狙った本作での最大の注目曲は、“路地裏の天才” マチュー・マリンスキー (ジュール・ベンシェトリ) がコンクール会場で弾くラフマニノフのピアノ協奏曲第2番。この壮大で美しい、私が大学時代からよく聴いていたピアノ協奏曲は、弾き切るのが大変な難曲だ。しかし、なぜ、貧民窟で不良仲間と一緒に遊んでいたマチューのような若者が世界的なピアニストの登竜門となるコンクールでその難曲を弾くことに？

ちなみに、あの流れるような美しさと荘厳さを兼ね備えた『ピアノ協奏曲第2番』は、どんな状況下で生まれたの？ そんなラフマニノフファン必見の映画が『ラフマニノフ ある愛の調べ』(07年) (『シネマ 19』374頁) だったので、本作とあわせて同作の鑑賞をお勧めしたい。

◆駅に置かれた、誰もが自由に弾ける1台のピアノを弾いているマチューの姿を見て、その才能を一目で見抜いたピエール・ゲイトナー教授（ランベール・ウィルソン）は、マチューをコンクールに出場させるべく、マチューに対してはもちろん、学校その他に対しても最大限の働きかけを始めることに。そんなストーリーは観る前から想像がつくし、ラストはもちろんコンクールでの優勝で終わることもわかっている。したがって、本作への期待はそのストーリーの展開だが、残念ながら本作ではそれがイマイチ……。

◆本作中盤以降は、コンクールの出場者選定の権限を握るピエール教授が自分の進退を覚悟してマチューの才能に賭け、また、当初はマチューの傲慢さと努力しないことに業を煮やしていた「女伯爵」ことエリザベス教授（クリスティン・スコット・トーマス）もそれに協力していくが、肝心のマチューは？それまで下層階級で生きてきたマチューだから、急激な環境の変化に戸惑ったのは当然だが、それにしても劇中に見るマチューの行動は如何なもの？また、アフリカ系の女子学生との恋模様の展開や、チンピラ仲間との確執の描き方もかなり表面的。さらに、ピエール教授の屋根裏部屋で頑張っているマチューに対して、ピエールの妻が要らざる言葉を投げつけるシークエンスにもアレレ……。

それよりも何よりも、当初の猛練習のため腱鞘炎になり、「演奏はダメ」と意思から宣言されたのに、いつの間にマチューはラフマニノフを完璧に弾けるようになったの？そこらはハチャメチャだからアレレ……。

◆『北京ヴァイオリン』では、「最後は北京駅！」のストーリーが涙を呼び、そこでのチャイコンの響きが感動を呼んだが、本作ではコンクール当日になっても、ふてくされたマチューがどこで何をしているかわからないままだから大変。ピエール教授とエリザベス教授は「マチューは必ずやってくる」と確信していたが、なぜ、直前にマチューは再度コンクールへの参加を決断したの？そして、走り、タクシーに乗ってギリギリ間に合ったという状況下、マチューはホントに最大のパフォーマンスを発揮することができるの？

まあ、結果はわかっているし、さまざまな楽曲の出来には満足だが、ストーリーはとにかくイマイチ……。

2019（令和元）年10月15日記